ニューヨーク補習授業校だより

平成２９年度　第１９号
校　長　　青木　正彦

＜自分の考えをもとう。そして日本語で表現しよう！＞

今年度の授業参観・懇談会が、5月6日から始まりました。13日、20日と続きます。
W校、中等部2年生の国語の授業を何気なく覗いてみると、そこでは、かわるがわる生徒が、何やら発表を行っていました。

枕草子　　**清少納言**

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。
夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。（略）

「枕草子」を読んで、自分流「枕草子」を書く。書いた文章をクラスの仲間と読み合い、さらに仲間の書いた「枕草子」を読んだ感想、特に誰のどんなところが良かったかを、皆に紹介するという授業でした。

「〇〇さんの作品は、目や耳で感じ取った表現が使われていて、感覚がよく伝わってきます。」「〇〇さんの作品は、文の終わりがすべて「る」で終わっていて、表現が工夫されていて面白いと思いました。」「〇〇さんは四季の好きなところだけでなく、嫌いなところも一つ書いていました。」（先生が）「清少納言も、をかしだけでなく、最後にわろしと表現してましたね。」
「〇〇さんは体言止めを使っているので、こちらに余韻を感じさせてくれます。」（先生が）「本当の枕草子みたいですね。先生もその作品を読みたくなりました。」
「〇〇さんの作品は情景が目に浮かんできます。」（先生が）「どれか一つ教えてください。」（生徒が）「秋、紅葉が夕日の色を反射している。」
「〇〇さんは、四季一つ一つについて詳しく書いていました。」（先生が）「これくらい。」と両手を開いて尋ねると、（生徒が）「これくらいです。」（笑）
授業参観なので、少し緊張した雰囲気が漂っていたものの、発表を聞きながら、頷いたり、笑みがこぼれたりする様子から、生徒たちは興味を持って発表に聞き入り、感心し、楽しんでいたようです。

清少納言の「枕草子」は、日本の季節のよさを表現した秀作です。清少納言の季節に対する感じ方や表現の仕方のよさを先生が解説するのではなく、生徒自身が自ら気付いていけるような授業展開が望まれるところです。「大事なところは、人から教わるのではなく、自分で掴み取らなければならない。」「人から教わったことは忘れてしまうことが多いが、自分で、見つけたこと、解決したことは、よく覚えている。なぜならその時に、力が備わるからである。」
この授業の生徒の目標は、大きく2つあります。一つは「枕草子」を参考に、自分流「枕草子」を書く。もう一つは仲間の「枕草子」を読み、その捉え方のよさ、表現のよさについて交流し合う。
この授業の先生のねらいは3つあります。1つ目は、季節に対する思いを自分の言葉で表現させ、発表させることで、「書く力」を身に付けさせたい。 2つ目は、自分流「枕草子」を書くために、生徒は主体的に清少納言の「枕草子」を読み取ろうとします。作成の目的があるが故に、清少納言のものの見方、考え方がどのように表現されているのか、自力で学ぼうとします。その表現の効果にも着目させたい。3つ目は、他者と自分のものの見方と考え方を比較させることで、自分の考えを広げさせたい。
従ってこの授業は、まさに課題を解決するために、思考力、判断力、表現力を駆使し、尚且つ主体的に取り組む学習の典型と言えます。これが現在の日本の国語教育の目指すところであり、補習校の国語教育の目指すところでもあるのです。

「根拠を明確にして、自分の意見を述べよう。」「父親に対する『私』の思いを捉え、自分の考えをもとう。」「筆者の絵画の見方について、自分の知識や体験と関連づけて考えをまとめよう。」「登場人物の行動や考え方について、自分の考えをもとう。」「手紙の基本的な書き方を知り、相手や目的に応じた手紙を書こう。」など、だから教科書には、そのような「課題解決のために、主体的に情報を読み取り、自分の考えをもち、それを表現しよう」という問題が今は必ずあるのです。